

10周年記念に昨年春よりとと道の再々開発を実施、ガイドブックのP15, 17,18,29の再々開発部分のガイド内容を改訂しましたのでご覧ください。

他方、西浜魚市場では出買（でがい）という、金浦以外の港から買い求めてきた魚も取引されており取扱い合計は3億円となっている。つまり、金浦の魚市場の取扱いの半分は地元で捕れた魚介、それ以外は出買連中が瀬戸内海沿岸の他の港（朝鮮物まで含む）や海上の漁船から買い集めてきた魚介が取引されていたということになる



漁方中



出買連中

#### 4. 久我邸

新川沿いの久我家は近世から近代にかけて、庄屋や戸長（こちょう・明治以降の呼び名）など地方行政に貢献し、多くの文化人を出した豪商。

現在の母家は寛延年間（1750頃）に建てられたもの。



吉田川沿いの久我邸と旧船着き場

#### 5. 吉浜干拓記念碑

とと道は魚市場から新川（吉田川）沿いに大河東橋まで一気に北上する。途中信号機のある交差点を過ぎると右手に須屋が現れる。かつて海だったこの一帯の干拓工事を記念して寛政9年（1797）に設置された吉浜干拓記念碑である。吉浜西国33ヶ所第4番霊場も祀られている。

この一帯はかつては魚渚郷（いおすなごう）とよばれ、深く入り組んだ入海だった。今から360年ほど前の寛文元年（1661）、福山藩はその入り口に500mほどの土手を築き107町歩（107ha）の新田が完成した。しかし、水はけが悪くたびたび浸水し、稲作には適さなかった。このため、ヒツカカを行う東西の山の間を新たに開削し、寛文11年（1671）に南北1.5kmの新川床をつくり、吉田川の流れをそこに付け替え、水はけを改善し、今に至っている。



明治時代の吉浜一帯



吉浜干拓記念碑

#### 6. 大河東橋～助実への急坂

この須屋を過ぎ、山陽新幹線高架下を通り抜け、吉田川沿いを北上する。山陽自動車道の橋脚を見上げるようになり、右折すると金浦地区と東大戸地区の境になる大河東橋に出る。橋を渡り吉田川左岸沿いの土手道を上流に進むと2025年3月に猛烈な笹藪を伐採して再開発した本来のとと道への2股になる。道標に従い右の山裾の道に入る。途中4月末には「きくざいきちげ」の白い花の見事な群落が見られる。笹藪のトンネルを抜けると従来の道と合流し、助実への急坂となる。



吉田川沿いに行く

#### 7. 畑の中のとと道遺構

振り返ると山陽自動車道の巨大な高架橋が眼下になっている。何故吉田川沿いのゆるやかな道ではなく、急な坂を登るのだろう？と不思議に思う登りである。土地の人によれば、吉田川ぞいはいわゆる崖となって迫り、道が作れなかったとのとである。



2025. 3再開発の山裾道への二股



きくざきいちげの群落



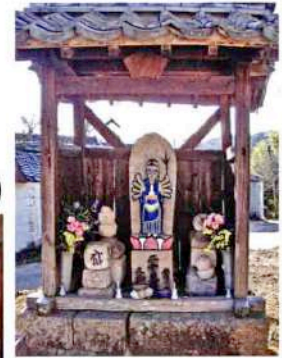
再開発されたとと道の笹藪トンネル



助実公会堂前広場

### 8. 助実(すげざね)地区聖地～大戸口バス停

丘陵の斜面を登りきると畑になり、道標に従い左手の踏み跡に入る。すぐ上に山羊小屋があり、山羊が嬉しそうに迎えてくれる。昔を偲ばせるような道を進むと、谷をはさんで正面に常夜灯の有る屋並みが見える。一旦下って登り返すと助実の「聖地」だ。



助実の観音様  
建立 元禄14年(1701)

常夜灯  
天保11年(1840)



#### 聖地 助実地区

この広場には荒神様、御子神(みこがみ)様、十二神様、観音様そして常夜灯と様々な神仏が所狭しと祀られている。常夜灯には今でも毎晩灯明が灯され、観音様は毎年夏のお盆の頃、驚くほどカラフルな彩色を施される。その上住民が集まる集会所も設置されており、お盆には250年も続く「水かえ踊り」と言う盆踊りが舞われる。

大井小学校区は盆踊りが盛んだが、ここがその発祥の地だという。そうした様子を見るにつけいかにも「聖地」といった雰囲気満ちていて、私たちは畏敬の念を込めてここを「助実の聖地」と呼ばせていただいた。

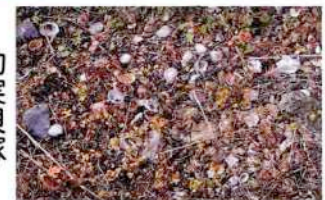
助実地区住宅街



### 9. 助実貝塚

助実地区から住宅街の中を下るとほどなく十字路になる。本来はまっすぐ下るがそこを右に曲がると住宅街の先に広場が現れ、大量の貝殻が無造作に散乱している。100年ほど前にはここで人骨も見つかったという。およそ4千年前の縄文時代後期の助実貝塚である。縄文時代には海がこの付近まで入り込み、ここが内陸になったのは江戸時代の吉浜干拓以降だという。笠岡市大島の津雲貝塚と同時代のものである。

助実貝塚



### 10. 大戸口バス停三方位道標

大戸口バス停に立つと自転車置き場の脇に明治39年(1906)12月と刻字された四角柱の道標が有る。

この道標は道路改修の際に移設されたということで、刻字からすると「ようすな」と「笠岡」の二俣の北側の道路脇に設置されていたものと思われる。

金浦からここまで方向を示す道標は無かったが、この道標に初めて「ようすな」の名前が現れる。出発点が初めて確認されたと言って良いだろう。とと道はここから県道を大戸上バス停へと向かう。



「ようすな」の地名がある道標

## 11. 大戸上バス停

車の多い県道を大戸上バス停を超え、さらに左手にカーブしながら進むと正面に山裾沿いに続く舗装道路が現れる。右折する感じでその道に入り北上する。

## 12. 大持(だいもち)池

車道を400mほど進むと、右手に大持池が見える。とと道は池の堤防を渡り、東側の踏み跡を辿って北上する。当初この踏み跡には細い灌木が密生し、とても歩けなかったが2025年3月に徹底的に伐採して通れるようになった。湖畔の散歩道と言った軽やかな雰囲気があふれる素敵な道だ。

池を過ぎ森の中を行くとエスポワール病院の駐車場に出る。その先の三叉路を左折、県道山口押撫線の舗装道路に出る。



大持池



岩神池

## 13. 岩神池

北に向かうとほどなく左手から走出新賀線が合流する。その道に入り、右手に現れる岩神池の西岸沿いに進む。この池は旧新山村では最も古い谷池で寛永5年(1628)に時の領主により作られたとの記録が残されている。

## 14. 岩神様(正式名称:岩上神社)

岩神池の北西の端で走出新賀線と別れ左折して岩神池の北岸を進む。150mほど行くと左手の小山に登る小道が現れる。道標に従いその道を登ると岩神様の南に出る。巨大な花崗岩がそのままご神体として祀られており、磐座(いわくら)信仰の力強い形が見られる。背後には神秘的な池が佇んでいる。



岩神様

## 15. 上長迫のとと道

岩神様の北側(NTTドコモ新賀西基地)の鉄塔の右脇を通ってかつて赤道(あかみち)と呼ばれたとと道遺構を辿る。

この一帯は私道と赤道が錯綜し、どこを歩けば良いのか分りにくかったが2025年3月に徹底的な調査を実施、ようやく「これだ!」と言えるコースが特定された。おだやかな棚田跡が広がる

この一帯は瀬戸内丘陵群と呼ばれ、明るくさわやかな道が続く。前方に迫山の集落が見える所にある畑には獣を防ぐ網が張り巡らされ、出入り口の扉は針金でとめられている。通った後は元のように針金で閉めていただきたい。



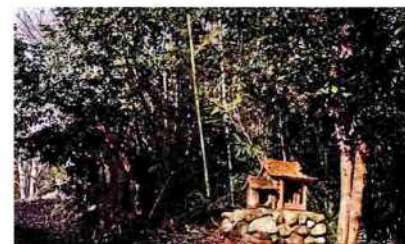
上長迫のとと道

## 16. 古道の存在を伝える空地とお稲荷さん

迫山の集落は丘陵の上部に向かって広がっている。道標に従い右に左に曲がりながら集落の中を登る。大木が茂る手前、右側に空き地が広がる。ここには江戸時代酒屋を営んでいた定平家の建物があった。それを明治11年に解体、重い建材を北へ約3km離れた長福寺まで運び、庫裏(住職や家族の居間)を建てたという。これから、明治中期以前にも尾根に道が有って活用されていたことが分る。この先の大木の下には素焼きの誠にチャーミングなお稲荷さんがある。再開発の折に藪の中から現れたた祠だ。ここからほどなくして走出新賀線に出る。



古道の存在を伝える空地



備前焼のお稲荷さん

#### 14. 川面四国40番霊場参拝道入口

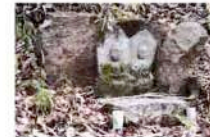
今石の四つ堂を出ると山道となり、ほどなく県道の一面に出る。それを渡って県道を左にやや下ると右手の山の斜面を斜めに登る草刈り道が現れる。以後、とにかく直上するとと道と、つづら折りを繰り返す車道が幾度か交叉することになる。昔と今の道路の作り方の違いがよく分かる区間である。草刈り道を登ると正面に40番霊場が安置された三叉路が現れる。そこでとと道は本来左に向うが、今ではその先に5mほどの高さの車道の擁壁が立ちはだかり、登れないため、右側に向い車道に出る。



40番霊場参拝道

#### 15. 移設された41,42番霊場

しばらく車道を登る。道路工事に伴い移設された41,42番霊場が県道の右側の雑草の中に見られる。冬には草刈のおかげで姿を現す。



40番霊場



41番霊場

#### 16. とと道沿いの43番霊場

車道をさらに進むと、雑草で覆われた正面の斜面の中央に、シーズンにはそこだけ雑草が刈り払われた道が現れる。これこそ正にかつてのとと道である。県道から別れた最初の登りは急だが、それを登りきると森の中のゆるやかな登りになり、ほどなく右手の山の斜面の上に第43番霊場が現れる。道なりに登って角坂池の右上を辿って再び県道に合流する。



42番霊場



43番霊場

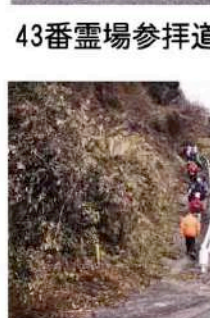
#### 17. 2つの県道登り口

矢掛の宇内から美星の毛野へ登る道は4本ほどあった。その内西側の2本は車道となった。中央の1本は昭和の初め、宇内から美星に至る道として県道に昇格することが決まっていた。ところが戦争のため工事は沙汰済みとなり、戦後になると、この道では車が通れないためまぼろしのままに終わり①「まぼろしの県道」と呼ばれる様になって姿を消した。東側の1本は県道だったが大正9年(1920)に笠岡＝成羽間の県道効率化のため現在のコースに付け替えられ②「旧県道」となり、これも森の中に姿を消した。



角坂中部草刈

推進協議会ではルートの特定に当り、2017年の毛野の二股道標の発見を踏まえ①のルートの探索を進め、最終的に全コースを特定した。2025年になって②のルートを変更して調査、整備を進め、この道も歩けるようになった。①は尾根筋を行きやや急で、②は沢筋を辿る部分があり、巾も広い。お好みに応じて①②どちらでも辿っていただきたい。



43番霊場参拝道 角坂最上部草刈

県道をやや下り左に曲がりバックする感じでヘアピンカーブを行くといよいよ55年ぶりに再開された道へ足を踏み入れることになる。最初の道標は②の「旧県道」入り口。さらに登ると白いガードレールの脇に2つめの①の「まぼろしの県道入り口」。どちらを選ぶか？ ①を登り②を下るのも一興だ。



まぼろしの県道入り口

#### 新道標

とと道ルートを探索・整備したもののそれだけでは迷わずに歩いていただくのは困難。かつての石の道標に変わる新しい道標が必要ということで風雨にさらされても長くもつ素材(アルミ板にUVカットの塩ビマットを貼付けたもの)を求め、3年に渡ってほぼ160ヶ所にグーグルマップのQRコード付きの道標を設置した(右写真)。地権者の許可が必要な地点も多々有りまだルート全体を十分にカバーしてはいない。残念ながら抜かれてしまうケースもあり、今後の管理も必要。数百年を生き抜いてきた古い石の道標達の堅固さ、信頼感に今更圧倒される。

